I-1

護国寺茶苑における仰木魯堂の茶室に関する研究
ー不昧軒・円成庵・艸雷庵の建築的特徴の分析ー
Study on tea-ceremony room of Rodo Ougi in the Gokokuji tea garden
Architectonic feature analysis in Fumaiken and Enjyouan and Souraian

大川三雄[1]，○竹田実紅[2]
*Mitsuo Ohkawa[1]，*Miku Takeda[2]

Abstract: This paper it is intended to clarify the Rodo Ougi's tea ceremony view and the tea room view. To that end, three of the tea house of Gokokuji tea garden, Fumaiken, Enjyouan, using a plan view of the Souraian, to analyze from the architectural features and functional aspects. As a result, it is possible following two points are cited as an architectural feature of the Rodo Ougi.
1. Than the formality and style of have a planar structure with an emphasis on functionality. Fumaiken, Enjyouan is, the structure that connects the tea house in the middle area, Souraian hermitage is in the skillfully treated constitute a complex function.
2. Tools and people have become conservative tea room to be the main.

１．序

１－１．研究目的

高橋箒庵が書いた『東都茶会記』『大正茶道記』『昭和茶道記』から護国寺で開かれた茶会を抽出し，護国寺茶苑を形成している個々の茶室の作品分析を通して，仰木魯堂の好みや特徴，茶の湯観，建築観を，より具体的かつ明確にする．

１－４．研究方法

護国寺茶苑内の３つの茶室，不昧軒，円成庵，艸雷庵の平面図を用い，建築的特徴と機能的側面からの分析することで，使い勝手を重視したといわれている仰木魯堂の茶の湯観，茶室観を明らかにする．

２．護国寺茶苑と仰木魯堂

東京都文京区大塚に位置し，五代将軍の母桂昌院の祈願によって天和元年（1681）に創建された，新義真宗の寺である．明治維新後は徳川家の縁所も薄くなり，苦悩していた高城義海貫主から依頼され，明治 42 年（1909）に高橋箒庵が檀徒総代になった．その後，箒庵の茶道本山をめざした計画を仰木魯堂が具現化し，関東の茶道本山と称されるまでになった．

仰木魯堂（仰木敬一郎・1863-1940）の生涯は第一期の「指物師時代」，第二期の仰木建築事務所時代」，第三期の「護国寺事業時代」の三期に分けることができる．特徴は①数寄屋建築家，茶人としての記録を一切残さない②多くの建築作品を残した③今までの概念にとらわれず各流派の好みや住宅の要素などを総合させた茶室をつくった④多くの数寄者と交流を持った，の４点があげられる．

３．３つの茶室とその特徴

護国寺茶苑を形成している茶室のうち，魯堂が作ったものと言われている正式な作品，不昧軒，円成庵，艸雷庵の平面図から魯堂の特徴を分析する．

■不昧軒・円成庵【茶室を中間領域でつなぐ構成】

松平不昧を記念する茶室として大正 15 年に建設された．小間 3 畳半台目中板入りの円成庵，広間 10 畳の不昧軒から構成されている．他に，水屋，納戸，台所，を含めた 30 余坪の他に，腰掛待合が附属されている．

墓門の扉に「弾指円成」の文字が掘られてあることにより，小間を円成庵，不昧軒に関しては，箒庵が尊敬する不昧の名から命名したということが分かる．しかし不昧好みが反映されているとは言い難い．不昧の記念茶寮ということを意識すれば，円成庵は不昧が設計した「管田庵」の中板の使い方を模倣したとう解釈ができる．

不昧軒・円成庵平面図

特徴としては，①不昧軒と円成庵が水屋でつながれた構成②２つを併用して茶会を開くことも，独立させそれぞれを使うことも可能③腰掛待合によって円成庵の露地，不昧軒の露地をわけられる，の３点があげら

１：日大理工・教員・建築　２：日大理工・院(前)・建築

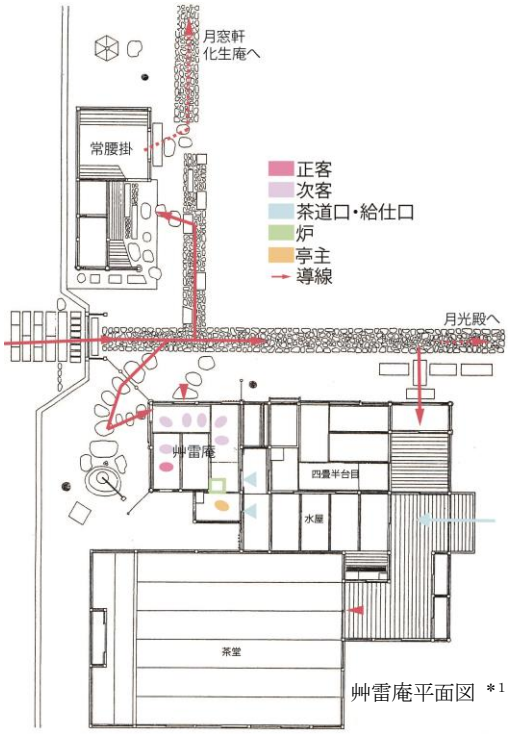
れる．これらができるのは，六畳と鞘の間と水屋が中間にある事で，客の空間，亭主の空間とどちらにも対応できる空間となっているからである．

玄関に入ると右側に板敷の勝手５畳の控えの間を通って，円成庵及び不昧軒へ行ける間取りになっており、住宅空間を彷彿とさせる設計ととらえることができる．

茶道記に記されている茶会では，円成庵を本席とし，不昧軒を茶道具観賞の場として利用していた．

■艸雷庵【複合的な機能を巧みに処理した構成】

昭和 11 年，裏千家茶道教授堀越梅子夫人により護国寺に茶室寄進の申し出があり，建設中であった多宝堂と月光殿との中間に計画された．猿面茶室を参考に構成された 4 畳半台目に，六畳、4 畳半台目，水屋，さらに茶堂を組み合わせ，多人数が様々な利用の仕方ができるように工夫されている．また，月光殿の縁から廊下伝えに出入りできるように配置されている．このように大寄せ茶会を可能にすることや開放的なしつらえを指示したのは箒庵ととらえられる．



艸雷庵平面図 *1

特徴としては，①茶苑の中で一番広い小間，②茶堂を付属している，③茶室と茶堂の間に水屋を設けている，の２点があげられる。

完成茶会と称して艸雷庵が使われた時は月光殿と併用して利用している．堂腰掛は，艸雷庵と月窓軒・化生庵との間，月光殿の前庭に位置する．そのため，大人数の茶会にも対応できるようになっている．

４．仰木魯堂の建築的特徴

建築的特徴として，①形式性や様式性よりも機能性を重視した平面構成をしている②道具や人が主となるよう控えめな茶室になっている，の２点あげることができる．

■形式性・様式性＜機能性

不昧軒と円成庵は広間と小間を鞘の間と水屋とでつなぎ，艸雷庵は茶堂という複合的な機能を水屋とでつないでいる．どちらも，機能性を重視した巧みな平面構成をしている．特に艸雷庵では，中柱には武家流好みの曲木を使い，釣棚には利休流好みの二重棚をしつらえている．従来の概念にとらわれない魯堂の姿勢の表れと読み取ることもできる．また,堂腰掛という独立した大規模の腰掛け待合を同じ敷地に設けていることも，大寄せ茶会を念頭に置いた工夫といえる．

各茶室の構成表

	不昧軒	円成庵	艸雷庵
広さ	十畳	三畳半台目中板	四畳半台目
分類	広間	小間	小間
中柱		赤松皮付/曲木	赤松皮付/曲木
三節の横竹		二節	○
釣棚		二重	二重/利休流
引き明け障子		○	○
その位置		貴人口側	点前座側
下がり壁	○	○	○
その位置	外観	客/化との境	竿と化の境
炉	広間切	上げ大目切	大目切
床の間位置	下座	下座	下座

■道具や人：主　建築：従

中村昌生が『茶室集成』で「一風変わった作風」、「草庵茶室の外観としては好ましい構成とは言えない」と述べている．それは、魯堂の茶室観の影響といえる．それまでの，草庵茶室の厳しさを緩め、華麗で派手すぎる数寄屋建築に侘びを加えるという手法を取り入れていた．それは，当時の数寄者たちの茶の湯観を応えるためでもあったのだろう．さらに魯堂はお茶好きであった．＊[2] 茶の湯の世界に入り込み，感性を磨き，茶を味わう最高の空間を具現化していった．魯堂にとっての茶室は“器”であった．建築や庭が道具を圧してはならず，逆にいかに優れた名品が置かれようとその道具に気圧されるようであってはならない，という考えを持っていたのだ．

魯堂の「茶道具や古美術の鑑賞の場である」という建築観によって，建物が主張するものではなく，あくまでも器のような茶室が建設されたと考えられる．これによって，観賞し使いこなす人間が，主体となる茶苑が出来上がった．

５．参考文献

[1] 中村昌生『茶室集成』淡交社 H20

[2] 根岸照彦『茶室の解明平面データ集成』建築資料研究所 2001.11

[3] 熊倉功夫『大正茶道記』(株)淡交社 H3.10.28

[4] 熊倉功夫『昭和茶道記』(株）淡交社 H14.3.29

*1 北尾晴道『茶室の展開図』(株)光村推古書院 S45.6.30 pp.79　*2 藤井喜三郎『艸居庵記』非売品 S55.9.1 pp.23